世田谷村日記

石山修武

十月二七日
二十五日は白井総長と建築学科教室メンバー何人かとで諸々の話し合いを持った。学部再編その他の件。
十六時梅沢良三先生、二件打合わせ。十七時半修了。八大建設来室。夜、世田谷で月下美人二輪咲く。

十月二八日
十三時修論ゼミ。十五時修了。十六時前上石神井早大高等学院へ。院長、山岸先生共に不在であったが、教務副主任星野先生等と会う。十六時過、電子・生命工学の石山さんの後、院生に建築学科とはの小レクチャー。早稲田大学本部及び執行部は学院に冷たい。早稲田の中枢は学院だからだ。中枢にはまだ本来の早稲田スピリッツが存続している、それはありきたりではあるが在野の精神で、常に執行部的精神とは対峙しやすいからだ。夜、世田谷で月下美人、又一輪咲く。

十月二九日
九時入江主任、嘉納先生と相談。稲門会の件学会の件その他。十時半創生入試百二名のスケッチ等見る。十二時前修了。どんな件でもいろんな意見がある事は面倒だが良い。十四時臨時教室会議。集まり悪し。十五時半修了。只今二十時京王線新宿駅。世田谷へ。今日は学科の会議中にプノンペンの渋井さんが来室してくれたようだ。来月十七日迄日本に居るようだから、一度お目にかかれれば幸いだ。

十月三〇日
朝七時。鈴木博之さんから送られて来た「都市のかなしみ・建築百年のかたち」読む。だいぶ前の事だが、彼が皇后墓陵について、仕切りに深い悲しみという様な事を言っていた時期があった。遂にその意味を聞きそびれているままに今日に至った。それはとも角彼はいよいよ成熟していると痛感した。十五年程も昔だったかすでにゲニウス・ロキを言い始めていた彼に、これは負け試合になるかも知れないぞと忠告ならぬ、戯れ事を言った事がある。当時はまだ誰も日本がこんな姿になるとは思っても見ていなかった。今、こんな状況になって、経済主義への疑問も一般的になりつつあるし、あらゆる言説に単純な希望等うかがい知る事が出来ぬ中になって、鈴木さんの言葉は不思議な光を発し始めている。皇后墓陵に関しての、今はおぼろな発言とこの本の通奏低音となっているかなしみとはたぶん違う。が、今の彼が正面切ってかなしみと言うような概念を出してきた事が大事なのだし、人間の成熟、文化の成熟にとって一種の必然でもある、哀しみ、アイロニー、メランコリアというような感性の十全な発露がここにはある。藤森照信の「たんぽぽの綿毛」だったか、と形式は異なるが同じ音が密かに響いている。別の感じ方から言えばここに述べられているのは高度成長、人口増加時代の青春からの確実な離脱の自覚だ。十二時過迄読みふけってしまった。十三時半大学。講談社園部氏来室。カンボジアの渋井さん来室。十六時卒論最終ゼミ。十七時半修了。再び「都市のかなしみ」について、この本は二年間にわたる中央公論誌への連載がベースになっている。連載時は

建築百年のかたちというタイトルであった。それが本の題名として都市のかなしみとなり、建築百年のかたちはサブタイトルとなった。出版元の中央公論社はとまどっただろう。鈴木博之の人柄を少しは知る私は、このタイトルに関して鈴木がかなしみという都市論としては異様とも思える表題をゆずらなかった事を憶測する。言い出したら、曲げぬ人だから。たかがタイトル、されどタイトル全編読了して、私は「都市のかなしみ」とした鈴木の真意を行間に求め続けた。ゲニウス・ロキを言う鈴木博之に負け戦さになるぜ、としたり顔でいった私が、少し恥ずかしい。前作、「都市へ」をこの都市のかなしみと併読するならば、鈴木の著作の価値をはっきり了解する事も出来よう。大昔板橋に小さな建築を建てた。建築の悲しみってのも確かにあって、大昔の決して満足ゆくモノではない物が延々と今でも、若い時のママ建ち続けているのも、それだ。今、作っているのも、その散歩圏に友人が居るか、居ないか調べた方が良いな。

少し中だるみした、今日この頃であったが、鈴木の論述に尻を蹴とばされる思いがして、気を引き締める。友人の背中が大きく見えだしたら、辛いだろうと思ってはいたが、あんまり距離を引き離される前に、少しは追いついておきたいけれど、異常な努力が必要だろう。「友が皆我より偉く見ゆる日よ、花を…。」の石川啄木の句があったが、そうならぬように力を尽くしたい。

しかし、日本の抒情歌人の哀しさの質と、鈴木の言う哀しさの距離は大きい。長田弘の抒情の変革を読み直す必要があるなこれは。